

島根の中山間地から Work as Life

第11回

「インクルーシブな集団形成」

野中 浩一

1. 集団形成の仕組みと範疇

フリースクールはたくさんあり、通信制高校の分校もたくさんある。その中で、私が運営する松江未来学園の特徴はなんですかと聞かれたら、生活共同体としての「集団形成」です、と答えている。マネージャー（経営・管理）、ソーシャルワーカー（福祉士）、カウンセラー（心理士）と3足の草鞋を履く私が、場づくりの配慮と、地域資源や家族・友人資源の接合と、個人および家族のケアをまとめて受け持つことにより、回復した子どもたち自身がケアの担い手になる仕組みづくりである。（※1）

インクルーシブ（包摂的な）教育という言葉があるが、日本ではなかなかそれは実現しにくいようである。学校では、学習の取り出し、通級の取り出し、別室登校、支援学級など、なにかと分けられる。分けた児童・生徒1人～数人に対してそれぞれ先生がつく手厚さによって、人手は不足しがちになる。

このような表現が適切かは分からないが、その点、未来学園は人的なコスパが良い。生徒30人。不登校だった子、学習の取り出しや通級を利用していた子、別室登校だった子、支援学級だった子、なんらかの診断やレッテルを貼られた経験がある子など、みんな一緒に包括して学習や活動を行っている。加えて、多学年編成ということもあり、日々、生徒が生徒のケアをしたり勉強を教え合う相互支援の仕組みを構築している。これは単に効率がいいということではなく、その状態がお互いに心地いいのである。



部屋① 16名程度が過ごせる和室



部屋② 8名程度が過ごせる部屋



部屋③ 6名程度が過ごせる小部屋



全校集会



試験



卒業式

写真1～6 1日あたり20名前後の生徒が、時間割りやプログラムに応じて3部屋に分かれて過ごす。毎日昼に集合して、お互いの不安・緊張緩和と理解促進のための対話の時間を設けている ※プライバシー保護のため写真は加工済

ただし、この未来学園のインクルーシブ教育にも限界がある。誰でも包括できているわけではない。そうした意味で未来学園は疑似インクルーシブ、半インクルーシブという状態であろう。この点は、未来学園の限界というよりも、私自身の支援の幅の限界ということかもしれない（松江未来学園のこれまでの包括範囲については図1参照）。

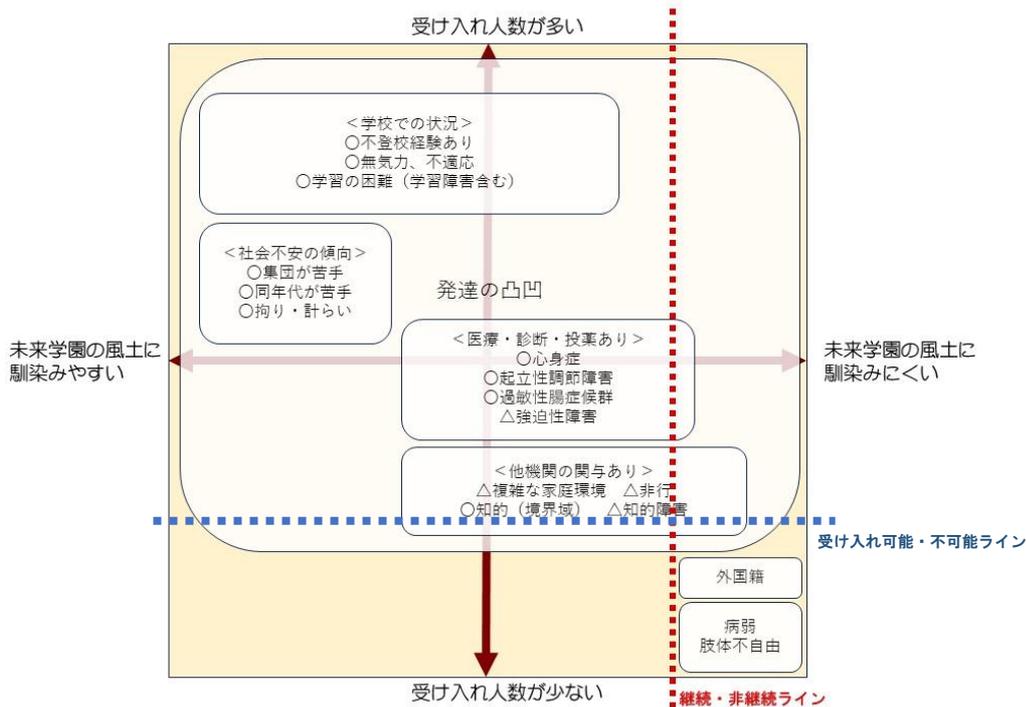


図1 松江未来学園における、受け入れと馴染みの相関（イメージ）

例えば、非行状態にある子どもについて、これまで受け入れはあるものの、うまくいったケース（＝卒業に至ったケース：図1の継続・非継続ライン左）とそうでないケース（＝途中で退学したケース：図1の継続・非継続ラインの右）が半々でくっきり分かれる。非行状態の子について、登校を継続して卒業ができたか、途中で退学したかの分かれ目になる要因は、「同性で非行傾向の子（仲間）がいたかどうか」と、

「ご家族との連携がとれていたかどうか」であったように思う。どちらか一方だけではフリースクールのコミュニティ参画が次第に難しくなったことは、限界の1例である。

2. 学習の主体性

松江未来学園にとって、「学習」はなくてはならない大事な要素である。フリースクールとして、安心できる居場所、アットホームな関係性、多彩な体験ももちろん大事なのだが、学習にも重心を置いている。これまでの「できない」「分からない」「続かない」が自然と変容する仕組みづくりを大事にしている。

入学当初、学習への取り組み方や、期限、学習をガイドしてくれるツール（達成表のようなもの）について、時間をかけて新入生全員に同時に説明する。その際、①私から全体に向けた言葉での案内、②説明書きによる視覚的補助、③年代の近い先輩による助言の三方向から理解を促す。

松江未来学園では、基本的に「勉強する時間ですよ」という合図はない。また、こちらから「勉強しなさい」ということもほぼない。その理由は、「やらなきゃいけない」という義務感がすでに生徒たちの中にあることを知っているからである。しかし一方で、入学したての新入生は、こちらが「あまり勉強ばかりすると身体に悪いから、ほどほどにして遊ぼう」といってもなかなか勉強をやめない。

その理由は2つある。まだ学園の場所や人に馴染んでいない中で、自由な時間というのはある種の寄る辺なさや息苦しさを伴う。その中で、与えられた勉強プリントに向かう時間は、馴染めていない自分を一時的に忘れるための恰好の材料になるからである。また、もう1つには、いつまでに・どれだけ終わらせるといいか、理解できているからである。クリアすべき課題が理解できていて、かつそれが自分にできそうなことなら、生徒たちはそれを潰していきたくなる。ゲームでミッションをクリアしていく、あの感覚である。

次に、入学から1~2ヵ月が経つと、勉強の意味が変わってくる。自分を守る道具だったものが、ごくありふれた学習課題となる。この時期には、多くの生徒は勉強のペースをつかみ、お互いに教え合いながら着々と終わらせていく。しかし、学習が苦手な生徒、困難感が強い生徒も少なくないため、そうした生徒には、日々の集団授業や個別サポートと一緒に支えるとともに、「自分から苦手な英語はじめてんだね、いいじゃない」「今日はだいぶ頑張ったね」「ちょっと気分転換に遊びに出よう」など声をかけている。

一番注意していることは、①口先だけで動かそうとしないこと、②べったりくっついて教えないことである。なかなか進まないときは、教える側も、教わる側も、もどかしいものである。そんなときは「一緒にやろう」としんどい時期と一緒に乗り越えるために、職員や先輩生徒が寄り添う。ただし、そのような場合にも、5分~15分くらい教えたら一旦離れるようにしている。その子自身で考えることを放棄しないようにするためと、その子の休憩を取りたいタイミングや科目を変更したいタイミングを、自身で感じたり考えたりする余地をつくるためである。

最後に、ほとんどの生徒に私からお願いするのは、「今〇〇くんが数学 I で詰まってるから教えてあげて」「今日の授業の中で 2 人ほどティーチングアシスタントをお願いしたいから、〇〇さんと〇〇くんお願いね」など、先生役を委任することである。これは勉強が得意な子に限らず、様々な生徒にお願いすることがある。自分で取り組むことが苦手でも、案外人に教えることにやりがいを感じるケースは多い。

以上のように、フリースクールに集うひと癖ある子や学習が苦手な子に対して、前向きに着実に学習を進めていく工夫を積み重ねている（※2）。

3. 聴けばいいというものでもない

「聴くこと」や「傾聴すること」は大事だという考え方がある。こうした考え方がまだ普及していなかった頃には、まず聴くことの価値を知ってもらうことが大事であった。一方で、この考え方が浸透している今の日本では、「聴く」ことの中身が大事であろうと考えている。（※3）

拙著「カウンセラー、元不登校の高校生たちと、フリースクールをつくる。」のコラムの中で、「聴く」とと「待つ」ことが大切であると書いた。しかし、深く落ち込んでいるわが子や、学校に向かう気力を失くしたわが子について、話を聞くこと自体が難しい場合や、聞くことがかえって事態や関係を混迷させる場合もある。手出し・口出しをしすぎると負の反動も大きいのが、かといって何もなければ事態は動かない。何もないことと、待つことは違う。

また、家族が日常生活の中で話を聞くことと、専門家が仕事として枠組みの中で聴くことも違う。（※4）

あるとき、カウンセリングについて、担任の先生が生徒に「話を聴いてもらったらすッキリするよ」と働きかける場面を何度か見かけたことがある。私自身にはそうした「聴いてもらう→スッキリする」といった直線的な因果関係の認識はないのだが、私と生徒を繋いでくれているこの先生は、カウンセリングで話をする・話を聞くことはスッキリすることだという、カタルシスの断片的な認識を持っていると私が理解していることは、大事なことのように思う。

私自身、聴くことは、その相手に興味をもって共感的に話を聞くことと、それに伴い自然と自己成長力が発露するのを促すことであろうと認識している。（※5）

それに繋がる話として、フリースクールの生徒、とりわけ今まさに苦しみ混迷している子について、私がひとり車を走らせている時間や、家にいる私的な時間に思いを巡らせることがある。こうした、その場にはいないその子との対話、細く切れそうになっている繋がり糸を注意深く点検する時間は、対面して聴く時間の裏面にある、自然かつ能動的に人と繋がるための、もう 1 つの「聴く」の形であるように感じている。

4. 登校刺激のすすめ

不登校になる前後で、医療を選択するケースは多い。学校では手に負えないと判断されたときには、積極的に医療連携が進められる現状を見てきた。松江未来学園に通う生徒も、入学前に医療にかかり、何らかの診断が出ていたり、薬を常用しているケースがますますある。

そんなフリースクールに通う生徒も、卒業までずっと順風満帆なわけではない。多くの生徒は卒業までに大なり小なり悩みや不安や葛藤や気持ちの揺れを訴えることがある。毎年2~3人は、来にくい時期が生じたり、辞めるか続けるかの話し合いをする生徒がいる。

私と生徒との関係がある程度持続している中で、何らかの意欲低下によって不登校傾向になった場合には、ご家族も交えた三者面談で一緒に今後の方向性を考えていく。そのときに、学校に通わないといけなといった建前、気持ちが向かないなら行かずに休むのも大事という建前を放っておかない厳しい面談になる。本人は間違いなく、学校に行くということを過剰に意識し、行動する気力が萎えている。母はまたあのときと同じことが繰り返されることに恐怖し、行かせたい気持ちを抑えて、距離を置いたり表面的な声掛けをすることがある。学校に行くか行かないかではなく、生きていく気力を掘り起こすために、建前を越えて、一緒に深いところに潜っていく。

一例として、未来学園に来にくくなっている生徒には、「行きたくないときは、自分の言葉で行きたくないと言うこと。そばに居てほしいなら、そばに居てほしいと言うこと。泣いたり、叫んだり、わがままとして思い切り主張すること。」と母の前で伝える。そしてお母さんには、「言ったら傷つくんじゃないか、わが子のぐしゃぐしゃに苦しむ顔や辛い顔を見たくないという思い、それらをひっくるめて、学校に行って友達と一緒に過ごすことや勉強を積み重ねることが大事だと思うなら、行きなさいと思いきり伝えてください」と本人の前で伝える。

すると、二律背反が起きる。病院の先生は、無理に学校に行かせてはいけない、登校刺激や「行きなさい」はタブーであるという。ところが、その当の学校の代表は「行きなさい」と言ってもいいという。

しかし私は「病院の先生の言うことと私の言うことは矛盾していません」と伝える。病院の先生は、その子と月に1回、わずかな時間しか会わない。その中で薬物治療をして、1か月の様子からその薬が合っているかどうか、どう調整したらいいかを経過から診察する。その治療の過程で、親が子どもに強い負の刺激を与えてはよくないと考えるのは当然である。一方で私は週に2~4日、1回につき4~5時間会う。その時間の中で個別ケアをすると同時に、他の職員や友人たちとの関わりから見立てやアプローチの修正を図りながら、発言の責任を日々負うことができる。その違いがあるだけである。

面談の結果、本人と学校だけではどうしようもなかったことも、最も長い時間を過ごす家庭にほんのわずかな変化が起こることで、止まっていたものごとが微妙に動き出す。不安や恐れや緊張がうっすら膜を張る状態から、本心の通う自由な場所になったとき、その子自身も自由を取り戻し、再び少しずつ意欲

が湧いてくる。血が巡りだす。ただし、このアプローチが功を奏するためには3つの条件が必要であると考えている。1つはタイミング、機が熟していること。もう1つは生徒および保護者との関係性が成立しており、ある程度において打算や裏表のない芯のある話し合いができること。最後の1つは、大人の側に、子どもを感じ取る（心身と時間の）余力があること。それら3点の微妙なバランスの上に、この私の提案は成立する。

場づくりの配慮と、地域資源や家族・友人資源の接合・包摂と、個人および家族のケアを同時進行することができるポジションだからこそ可能になるケアの形があると感じている。

5. 不登校支援の覚書

長らく書こう書こうとあっていて素材のまま文章になっていない話題がいくつかある。文章にするのは諦めて、ここに覚書として記したい。

<三方良し>

学校でトラブルから不登校に発展するとき、生徒本人と、保護者さんと、先生と、それぞれ話し合っているようで、お互いの困り感や考えはズレていることが多い。そんな場面を見たとき、私は間に立ちたいと思う。第三者が、それぞれの考えや想いをニュートラルな状態で聞き、共有すると、お互いに相手が少し見えてくる。相手が見えてくると、自然とものごととは変化していく。

よくある学校での面談は、もつれて絡まった毛糸の束を、三者が思い思いの方向に引っ張っているような感じがする。当事者がいない中で学校の上役同士だけで策を練るほどに、毛糸はもつれ固まっていく。違う方向から引っ張るのをやめて、固めるのもやめて、当事者を中心として、関係する皆で毛糸の絡まり具合をじっくり観察しながら順番にほぐしあっていくと、多少はましになる。私は誰か一方の利害を優先した解決よりも、三者がお互いに状況を俯瞰しながら一緒にどうしようかと考え合える、三方良しの方向を模索していきたいと考えている。

<共通言語を探す>

私が初回面談をするとき、相手は長らくひきこもっている高校生、外との関係が希薄になっている高校生であることが多い。そのため、初回面談では「長く時間をつかっている好きなことって何？」と聞くことが多い。すると大体「ゲーム」や「動画」と返ってくる。

「ゲームっていろいろあるけど、タイトルとかハードとか教えてもらっていい」と聞くと、「スマブラ」「マイクラ」「原神」「ヴァロラント」などと返ってくる。このやりとりの間、相手の子は、こちらがどこまで分かるか半信半疑である。「原神、アップデートの度に15ギガとかだからきついわ」と返すと、「いや自分もスマホ、ギガあるやつに替えたいっす」「今のスマホ、ギガいくつなの？」と繋がる。会話のキャッチボールがはじまる。横にいるお母さんは、他人とこんなに話しているのは久しぶりだとびっくり

している。こうしたことが時折ある。

引きこもっている子の多くは、話したいことに満ちていると感じている。その子その子の興味の窓口を探して、できることなら一緒に楽しく話がしたいと思う。こうした「好き」や「楽しい」から私との関係を始めて、徐々に同年代の生徒との関係に繋げていく。これが高校生ではなく小学生の場合は、まず休み時間に一緒に遊びにまぜてもらってから始めることが多い。

<あまのじゃく>

私は何かが極端に傾くことに違和感を覚える質である。自然とものごとの裏や逆を考えたり、疑ったりする。どちらかに与するのではなく、全体の布置やバランスを見ていたいタイプである。

「不登校支援」「ひきこもり支援」「発達障害支援」。状態で区分して一括りに支援を考えると、話はしやすけれど、実態からは遠のくと思うことがある。線引きの線が自然と消えるような、区切りが曖昧な方が良いように思っている。洋間のドアより、和室の障子やふすまの方が、人を感じやすい。

「学校は無理に行かなくてもいい」「学校は同調圧力があって、弱った子にとって生きにくい場である」と聞くことがある。こうした言葉は、誰がどこで言うかによっても感じ方が変わるように思う。先日、不登校支援の集まりに参加した際、誰もが「学校に行かなくてもいい」という考えに同意を示している様子を見て、他の意見が言えない居心地の悪さを感じたことがある。もちろん、苦しんでまで無理に学校に行かなくてもいいということではあるが、そんなに簡単に一方向の意見に皆で同調してもいいものか。

もともと義務教育は、行き場がない子が労働させられ大人に不当搾取されたり、みなし子や浮浪児が読み書きできないままにギャング集団化したりすることを防ぐ、セイフティネットとしての意味合いもあったはずではなかったか。登校しないことを選び回復する子もあれば、逆に、夜の街に身を投げだす東横キッズのようなこともある。あまり単純に流行りの方向に行き過ぎる状況には、警戒感がはたらく。

学校に「通えない人」や「通わなくていい」という人がいる。一方で、「楽しく元気に通っている人」や「通った方がいい」という人もいる。私はどちらにも共感できるものがある。その個々の事情によって、自分の立ち位置を変化させられる方がいいと考えている。

注釈

※1 私だけで代替できない役割、特にお母さんのような役割やお兄さん・お姉さんのような役割を他のスタッフに委ね、場が安定している側面もある。

※2 本編で書いたような学習の工夫については、三宮（2018）の『メタ認知で〈学ぶ力〉を高める 認知心理学が解き明かす効果的学習法』から学ぶことが多かった。

※3 余談であるが、この「聴く」という表現、普及する過程において、なにか専門家然とした、うっすら鼻につく感じがするのは私だけだろうか。「気づき」という表現も同様かもしれない。これら専門側から世間側に流入した言葉が「分かっている人感」を漂わせるものに変質したことは当然といえば当然であるが、面白いなりゆきであると感じている。

※4 東畑（2023）は著書『ふつうの相談』の中で、クラインマンのヘルス・ケア・システムを紹介し、民間セクターのケアにおけるカバー範囲の広さを示すとともに、心の臨床の基礎は専門知（学派知と現場知を合わせたもの）ではなく世間知にあると、新たな見方を提示した。私が心の臨床に携わっている学校という場所は、子ども、保護者、先生、地域、私も含めた様々な役割をもつ職員といった、様々な世間知と専門知の混ざり合う場所である。

※5 傾聴について諸富（2021）は著書『カール・ロジャーズ カウンセリングの原点』の中で、ロジャーズの「治療的な関係をしばらくの間経験したクライアントの変化は、セラピストの態度を反映したものになっていく。クライアントは相手が自分の感情を受容的に傾聴していることに気づくにつれて、少しずつ自分自身に耳を傾けるようになっていく」という言葉を引用し、「自分自身へのかかわり方が変わる」ところに、傾聴の意味があると述べている。

引用・参考文献

三宮真智子（2018）『メタ認知で〈学ぶ力〉を高める 認知心理学が解き明かす効果的学習法』北大路書房

東畑開人（2023）『ふつうの相談』金剛出版

諸富祥彦（2021）『カール・ロジャーズ カウンセリングの原点』KADOKAWA